NOVARTIS

多職種協議でタスクを見直しDoor-To-Balloon Timeを短縮

Image

Q1 施設の特徴と急性冠症候群（ACS）患者さんの最近の傾向について教えてください。

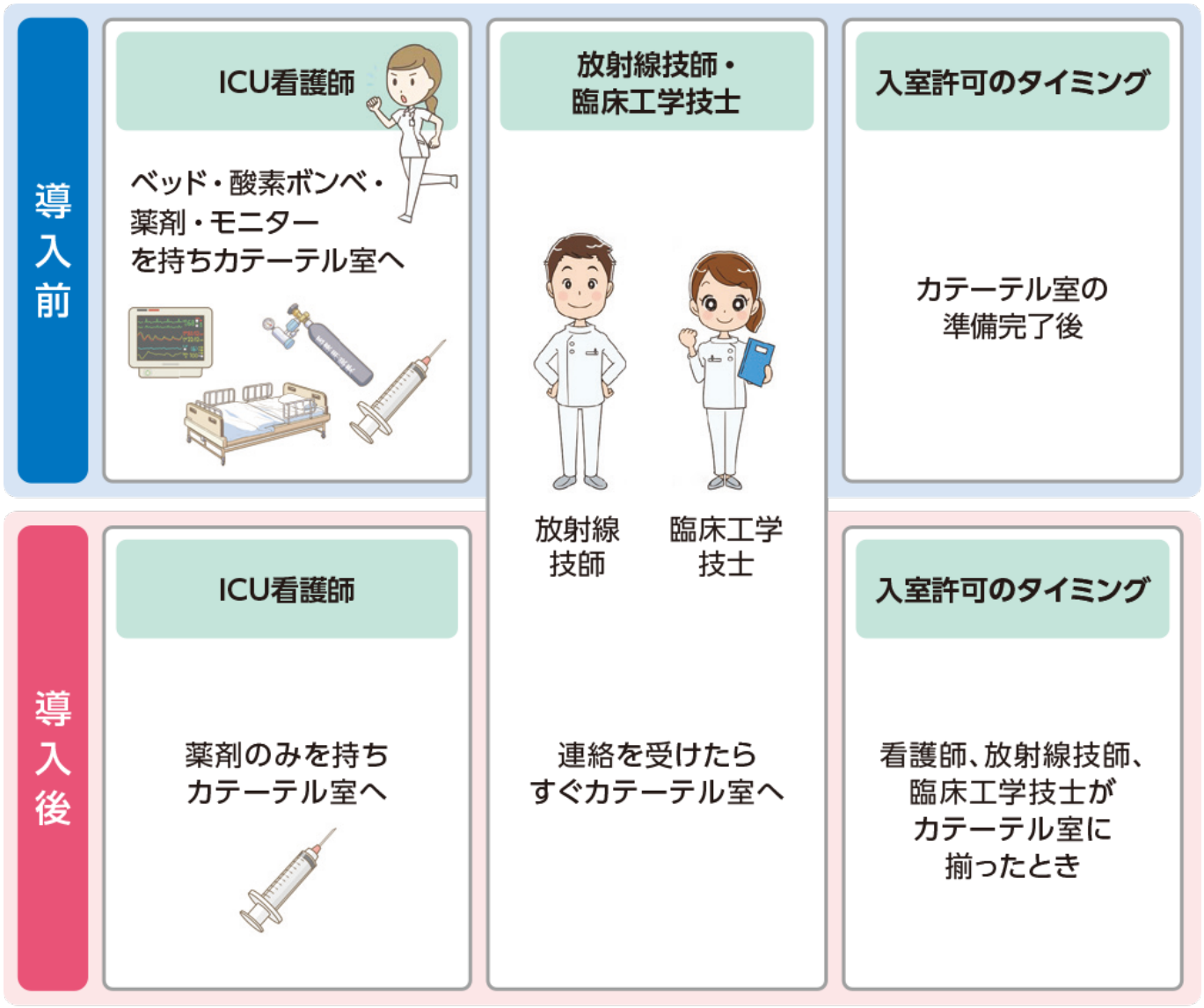
当院は名古屋市南部を中心とする医療圏の三次救急施設として、「受け入れを断らない」を理念に救急医療を展開しています。救急での内科的な疾患としてはACSが多いため、循環器内科では救急のバックアップにも注力しています。
最近のACS患者さんは10年前より平均年齢が4~5歳ほど高齢化している一方で、喫煙率が若干高い地域性や生活習慣の欧米化などを背景に、若年化の傾向も見られます。

Q2 ACSの患者像や治療の課題について教えてください。

ACSの患者像としては高血圧症、脂質異常症、糖尿病、腎疾患などの合併例が多く、全体として多枝病変や石灰化病変、分岐部病変、びまん性病変など病態の複雑化が認められます。治療の課題としては、ご自身の病識が乏しく、服薬アドヒアランスや生活習慣の是正が難しい患者さんが少なくないことが挙げられます。
また、ACSの発症から再灌流までの時間（Onset-To-Balloon Time: OTBT）の短縮も課題です。当院では、医師、集中治療室（ICU）看護師、放射線看護師、放射線技師、臨床工学技士などがカテーテル室に入室するまでの流れや当直体制を多職種で見直し、診断からカテーテル室入室までのプロトコールを作成しました（図1）。その結果、各職種のタスクが明確になりロスタイムが減ったことで、来院から再灌流までの時間（Door-To-Balloon Time: DTBT）が以前より15分ほど短縮できました。

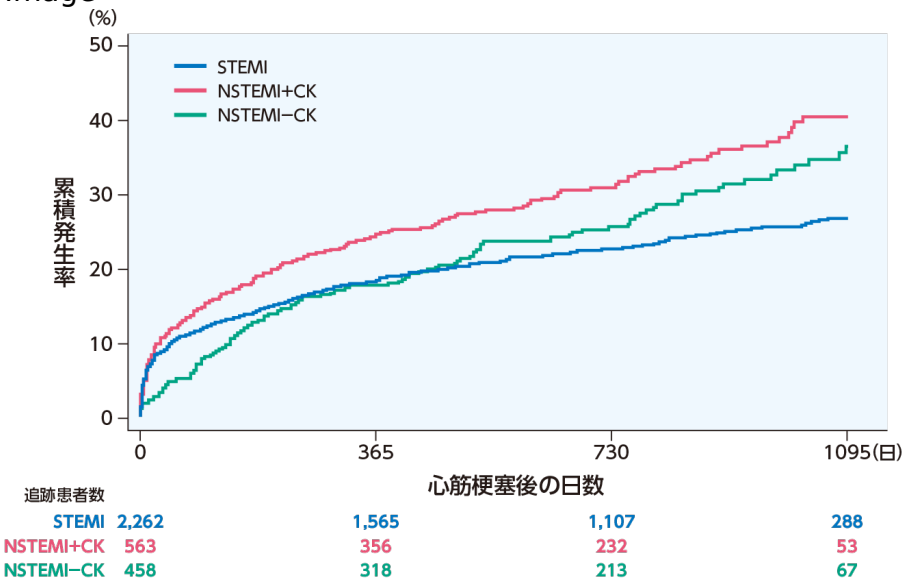
図1 DTBT短縮プロトコール導入前後の体制

Image



提供　津田卓眞先生

Q3 ACS□□□



Image

【対象・方法】2012年7月～2014年3月に発症48時間以内に入院した急性心筋梗塞患者を対象に、長期予後を比較検討した。
解析対象：3群比較の解析対象3,283例（STEMI群2,262例、NSTEMI+CK群563例、NSTEMI−CK群458例）

【解析方法】主要エンドポイント（死亡、非致死性心筋梗塞、非致死性脳卒中、心不全、不安定狭心症に対する血行再建術の複合）の累積発生率をKaplan-Meier法で推定し、その差をlog-rank検定を用いて比較した。
ハザード比及び95%CIはCox比例ハザードモデルを用いて算出した。多変量解析の調整には、年齢、性別、高血圧、糖尿病、脂質異常症、CKD、現在の喫煙状況、心筋梗塞既往、脳卒中既往、Killip分類、MIの種類、発症から入院までの時間の対数、緊急冠動脈造影、初回PCIおよび緊急バイパス手術を含めた。有意差検定における基準は、$p<0.05$と設定した。

STEMI：ST上昇型心筋梗塞、NSTEMI：非ST上昇型心筋梗塞、CK：クレアチンキナーゼ（+はCK上昇を伴う、−はCK上昇を伴わない）

Ishihara M, et al. Circ J. 2017 ; 81 (7): 958-965.

1) Ishihara M, et al. Circ J. 2017 ; 81 (7) : 958-965.

弊社製品についてのお問い合わせ

お問い合わせ

Source URL: *https://www.pro.novartis.com/jp-ja/products/leqvio/interview/04*